

氏名	薛 杉
学位の種類	博士（国際日本研究）
学位記番号	博 甲 第 8 7 9 9 号
学位授与年月日	平成 3 0 年 9 月 2 5 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日本アニメーション映画における人物造形 —宮崎駿と新海誠の比較研究—

主査	筑波大学 教授	Ph.D. (文学)	今 泉 容 子
副査	筑波大学 教授	博士 (宗教学)	津 城 寛 文
副査	筑波大学 准教授	博士 (学術)	平 石 典 子
副査	筑波大学 教授	博士 (文学)	徳 丸 亜 木

論 文 の 要 旨

本論文の目的は、日本アニメーション監督の宮崎駿と新海誠を取り上げ、二人の映画作品における人物像を分析し、それぞれの特徴を明らかにすることである。とくに本論文が重点をおいたのは、宮崎の影響によってアニメーション映画づくりを目指した新海が、宮崎映画の登場人物とは大きく異なるヒーロー・ヒロインを造形したことを、映像分析によって明示することである。

そのために本論文は、序章と終章のほか、第一部から第三部までの三つの部からなる構成をとり、第一部と第二部においてそれぞれ宮崎作品、新海作品の詳細な映像分析を行い、第三部ではそれらの分析結果を踏まえて両監督の作品の比較論を展開する。全体の構成は以下のとおりである。

序章

第一部 宮崎駿のアニメーション (考察される映画：『天空の城ラピュタ』、『魔女の宅急便』、『千と千尋の神隠し』、『ハウルの動く城』)

第二部 新海誠のアニメーション (考察される映画：『雲のむこう、約束の場所』、『秒速5センチメートル』、『言の葉の庭』、『君の名は。』)

第三部 宮崎駿と新海誠の比較 (考察されるテーマ：人間関係、自己同一性、孤独など)

終章

序章では、本研究の方法として映画の文法に着眼した詳細な映像分析を用いることが述べられ、研究対象となる映画作品の選択基準が明らかにされる。宮崎と新海の映画作品から、それぞれ四つの考察対象作品が選ばれるが、その選択基準は描写の大半が「ティーンエイジャーの主人公」の日常生活の描写であることとされる。宮崎作品には、戦闘場面が多い作品や、中年が主人公になる作品もある

が、それらは本論文の考察対象の外に置かれる。したがって考察対象として選ばれるのは、『天空の城ラピュタ』、『魔女の宅急便』、『千と千尋の神隠し』、『ハウルの動く城』となる。新海作品は宮崎作品とくらべて数が少ないが、ティーンエイジャーの主人公は一貫して登場し、主人公の造形をめぐって宮崎作品と比較しうる高度な完成度をもつ作品が存在する。それらは『雲のむこう、約束の場所』、『秒速5センチメートル』、『言の葉の庭』、『君の名は。』であり、本研究対象として選ばれている。

第一部を構成する四つの章においては、宮崎映画の主人公がひとつの環境から引き離されて、よそ者として別の環境に置かれて孤立する状況が出現する映画や、今いる環境のなかで人々から孤立して別の環境を羨望する主人公が登場する映画が取り上げられ、映画の構図分析を行いながら主人公の孤立が明らかにされていく。たとえば第二章の『魔女の宅急便』の主人公キキが、大空を箒に乗って新たな町へ飛ぶシーケンスが取り上げられ、鳥たちが画面に入ってくると、鳥たちはキキと同じショットサイズとなり、同じ方向へ飛ぶことが映像解析のうえで意味することは、キキと自然（鳥たち）が一体化していることである、と述べられる。しかし、人間の乗った船が画面に入ってくると、船がキキと逆方向へ進行し、ショットサイズが異なることから、両者の不調和が暗示されることや、この不調和がやがて町に居住する主人公が人間たちと対立し、孤独を感じることの予兆であることが、述べられている。こうした映像分析はほかの章でも展開され、宮崎映画のティーンエイジャーの主人公たちが周囲の人間たちから孤立した状態におかれることが考察される。

第二部の四つの章は、新海監督の四つの劇場公開映画の主人公が孤独である状況を、映像分析によって明らかにする。人間社会に存在する規則や秩序が、主人公を束縛し、孤独感を抱える要因であることが考察される。たとえば、第七章で取り上げられる『言の葉の庭』において、重要な映像手法であるクローズアップが最初に出現するのは、地下鉄改札機に主人公の秋月がICカードをかざす場面であるが、なぜそのような些細な行為がクローズアップになるのかが解明されていく。裕福ではない主人公が支出するたびに所有金額が減って、彼の生活は圧迫され目標の実現を困難にするが、金銭を払うという社会の規則に従わなければ、夢を実現することができないため、そのような主人公のジレンマを生み出す社会的規則がクローズアップで示されるのである、と論考されていく。このクローズアップは、映画のプロット展開のうえでは意味をもたないが、映像として大きな役割を与えられていることが、本研究によって明示される。

第三部では、第一部と第二部で考察した宮崎映画と新海映画の比較を試みる。孤独をかかえるティーンエイジャーの主人公の登場は、宮崎と新海の映画に共通したテーマであるが、その孤独状態の展開に違いが見られることが述べられる。宮崎映画の場合、主人公は最終的に孤独を解消し、喪失したもの（人間関係、記憶と自己同一性、居場所など）を回復して、良好な状態に到達する。それに対して、新海映画の場合、周囲の変化はあっても、主人公には変化がなく、孤独は持続したままである。

以上のように、宮崎映画と新海映画の主人公たちの人物造形を、孤独というキーワードをめぐって詳細な映像分析をほどこすことによって解明しようとしたものが、本論文である。

審査の要旨

1 批評

本論文はアニメーション映画研究の成果であり、宮崎駿と新海誠の映画作品からそれぞれ四つずつ選び、研究対象としている。宮崎映画も新海映画も、それぞれ多くの先行研究があるが、両者を比較する試みはまだ本格的になされていない。さらに本研究の独特な点として挙げられるのは、映像を詳

細に分析することから作品の意味を引き出すショット分析を駆使している点である。すなわち、台詞だけでは読み取れない意味を、映画の文法に基づいたショット分析の実践をとおして読み取ろうとしているのである。両監督の映画作品に関して、ショット分析を実践した研究の成果がほとんど存在していないため、そこに本研究の大きな意義が認められよう。

第一部と第二部は、それぞれ宮崎監督作品と新海監督作品の各論となっている。孤独というキーワードが設定され、孤独に結びつくと思われるシークエンスが抜粋され、ショット分析がほどこされていく。抜粋されたシークエンスがさまざまな映像の規則を用いて分析され、膨大な分析結果の記述が積み重ねられていく。たとえば、『天空の城ラピュタ』の主人公シータが初めてパズーに出会うシークエンスでは、二人を描く「超ロングショット」に注目している。超ロングショットは通常、風景を描くために用いられる手法であり、人物は米粒くらいの小さいサイズになってしまうが、それが二人の描写に用いられているのは、巨大な洞窟のなかで二人が至近距離に位置していることが一目瞭然になるからである、という考察がなされる。さらに至近距離にある二人にランプの光があてられ、彼らの影が壁にミディアムショットの大きさ（人物がよく見える大きさ）で映し出されるという演出によって、二人が食事や談話を共有していくようすがはっきりと見え、この超ロングショットが人間関係を示すシンメトリーの構図を形成しているため、二人が調和と信頼を達成したことが明らかになる、と説得力のある解釈が展開されていく。このようなショット分析から解釈を引き出すことは、先行研究に存在しないアプローチであり、宮崎映画および新海映画を研究する新たな方向を切り開くものである。重要なシークエンスに着眼する感性と、着眼したシークエンスに意味のある解釈を付与する分析スキルに裏付けられた論文であると言える。

しかし、本論文に問題がないわけではない。抜粋したシークエンスの分析は説得力があるが、宮崎映画と新海映画の比較論はさらに完成度を高めることが可能だったのではないだろうか。たしかに本論文の第三部において、比較の結論は出されている。その結論は、宮崎映画の主人公は孤独を克服し、幸福な成長を遂げたのに対して、新海監督の主人公は孤独を抱いたままである、という明快な図式である。しかし、そうした図式に完全におさまり切らないと思われる新海監督の『君の名は。』がある。『君の名は。』では、二人の主人公は住民 500 人を救うため奔走している。その他人を救おうとする努力は、新海作品に特徴的な孤独と、どのように関連づけられるのであろうか。この新海の作品は、宮崎と新海の比較論のなかで、どのような位置づけになるのであろうか。ひとつひとつのシークエンスを分析する力がたいへん優れているだけに、第三部における比較論がもう少し展開されていれば、さらに優良な論文になったのではないかと、と思われる。

とはいえ、映画の視覚的要素に着眼し、映画の文法に基づいた斬新な分析手法を駆使して独創的な解釈を積み重ねた本論文の成果は、極めて優れたものであると判断される。

2 最終試験

平成30年7月25日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際日本研究）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。